

2010.4.29

文京区民センター

「ユートピアの落とし穴を超えて」

西川伸一（明治大学）

1 拙著の執筆動機

今年の1月に『オーウェル『動物農場』の政治学』（ロゴス）という拙著を刊行しました。オーウェルについてははずぶの素人の私が、なぜ無謀にも本を出すに至ったのか。それは『動物農場』を読んで、ここに政治の核心の束があると感動したからです。

もちろんオーウェルが『動物農場』の素材にしているのは、ロシア革命が裏切られた革命に堕していくプロセスです。ですが、『動物農場』を私が読み進めるうちに、ここに描かれている政治現象の多くは、ソヴィエト神話の暴露にとどまらず、もっと普遍的に読み替えることができると確信するに至りました。

そこで、『動物農場』の場面場面から私なりに思いついた政治現象を結びつけてみる。それによって、オーウェルのメッセージを、時代を超えて地域を越えてとらえ直してみようともくろんだのが拙著になります。

2 牛乳盗難事件が示唆するもの

イギリスのとある荘園農場の動物たちが、ろくにえさを与えてくれない荘園領主のジョーンズ氏に反乱を起こす企みを練るところから、このおとぎ話ははじまります。この動物革命はあっけなく成功します。

革命政権は矢継ぎ早に新政策を打ち出します。第一に、革命直後に贅を尽くしたジョーンズの屋敷をみて動物たちは仰天します。そして、この屋敷は博物館として保管し、動物はだれも住んではならないことを決議しました。第二に、同じく革命直後に「七戒」とよばれる憲法にあたるルールを制定しました。「七戒」の具体的条文は次のとおりです。

- 一、いやしくも二本の脚で歩くものは、すべて敵である。
- 二、いやしくも四本の脚で歩くもの、もしくは翼をもっているものは、すべて味方である。
- 三、およそ動物たるものは、衣服を身につけないこと。

四、およそ動物たるものは、ベッドで眠らないこと。

五、およそ動物たるものは、酒をのまないこと。

六、およそ動物たるものは、他の動物を殺害しないこと。

七、すべての動物は平等である。

ところが、その「七戒」が制定されたその日に、絞りたての牛乳が動物総がかりでの干し草の取り入れ作業の間に、盗難するという事件が起こります。動物革命が墮落する芽生えがすでに革命直後にみられたのです。その犯人は豚たちであることがのちに判明します。豚たちが毎日食糧にまぜていたのです。

「七戒」の第 7 戒では、動物はすべて平等であると謳われていました。ただし、このおとぎ話では、動物たちの中で豚たちが知能において圧倒的に勝る設定になっています。まもなく、豚たちが人間に代わって支配者となります。

豚たちは牛乳の一件を他の動物たちに謝罪するどころか、風で落ちたリンゴも、動物たちで平等に分け与えるのではなく、豚たちが独占すべきだと開き直ります。その理由がふるっています。動物農場では、ナポレオンという豚が独裁者の地位に就きます。その意をくんだスクィーラーという豚が動物たちの前で演説します。スクィーラーは口がうまく、「黒を白といいくるめることができる」と評判でした。

「同志諸君よ！」と彼は叫んだ。「諸君は、まさか、われわれ豚が、がりがり根性で、特権風を吹かして、ミルクやリンゴをひとり占めにするのだ、などとはお考えにならないだろう？〔中略〕その目的はただひとつ、健康を保持するためなのだ。ミルクとリンゴは（同志諸君、科学がちゃんと証明しているのだが）、豚の福祉にぜったい欠くことのできない成分を含んでいるのだ。われわれ豚は、頭脳労働に従事している。この農場の運営と組織は、すべてわれわれの双肩にかかっている。

詭弁のお手本のようなのです。スクィーラーは「同志諸君」と呼びかけて、豚と他の動物の連帯をまずふりまきます。その上で、「頭脳労働」を口実に豚の特権を認めさせようとしているのです。豚は動物農場の運営に死活的な「頭脳労働」を担っている。従って、常に健康を保たなければならない。健康を保つにはミルクとリンゴが欠かせない。それは「科学が証明している」のだ、とまくしたてます。

ここに「科学」ということばを挿入しているところが興味深い点です。「科学が証明している」とは、1930年代における共産党のプロパガンダの謳い文句だ

ったそうです。さらにいえば、1930年代はソ連を望ましい未来社会のモデルとして賞賛する論調が目立った時期でした。

ユートピアの落とし穴の一つ目は、革命を指導した人々が甘い汁を独占しようとすることにあります。自分たちが苦勞して革命を成就させたのだから、その分け前は多めにぶんどってしかるべきだと考えるのではないのでしょうか。しかも、それを「科学」を持ち出してイデオロギー的に正当化するから、始末に負えないのです。

3 「そんなことはなかった」と言わせない

革命により権力を握った豚たちは、自分たちの都合のいいような社会運営をはかります。その過程で、革命の理想が現実と乖離していきます。言い換えれば、動物革命の決議や「七戒」が豚たちの邪魔になっていくのです。

そこで、つじつま合わせが行われます。たとえば、さきほどジョーンズの屋敷には住まないと動物たちが誓い合ったことをご紹介します。しかし豚たちは居心地のいいジョーンズの屋敷に引っ越します。

すでにご紹介したとおり、「農場住宅は博物館として保存すべきである」「動物は、誰もそこに住んではならない」という決議がなされていました。当然、動物たちはこの決議を覚えていて、豚たちの引っ越しに首をかしげました。すると、例のスクイーラーが遣わされて、「そんなことはなかった」といってくるめたのです。

一方、「七戒」は大納屋の壁に「30ヤード離れたところからでも読める」ように大きく書かれていました。その第4戒は「およそ動物たるものは、ベッドで眠らないこと」です。しかし、農場住宅に暮らす豚たちはベッドで寝ていたのです。不審に思った動物が第4戒の確認にいくと、そこには「およそ動物たるものは、シーツをかけたベッドで眠らないこと」と書いてありました。もちろん、豚たちが先回りして加筆したのです。その結果、第4戒の意味は逆転し、基本的にベッドで眠ってよいことになりました。

ユートピアの落とし穴に陥らない第二の点は、記憶を記録にとどめ、記録をオリジナルのまま厳重に保存することだと思います。「そんなことはなかった」と権力に言わせないしくみをセットしておく。権力を記録という証拠でしぼる。

記録が歴史を支配します。記録された歴史が為政者を制約します。過去に縛られたくない為政者は歴史の改ざんをいとわず、都合の悪い記録を平気で抹消

しようとしています。そのようなことをさせない仕掛けが必要です。

4 慣れていく怖さ

さて、しばらくして、動物農場では体制引き締めのため、動物たちが次々と粛清されていきます。

ところが、「七戒」の第6戒は「およそ動物たるものは、他の動物を殺害しないこと」となっていました。動物たちはひそかに「先日の処刑は、たしかにあの規定と矛盾しているな、という感じがした」のでした。そこでまたつじつま合わせが行われます。粛清事件のあと、第6戒は「およそ動物たるものは、理由もなく、他の動物を殺害しないこと」とひそかに訂正されてしまいます。記憶力に劣る豚以外の動物たちは、この「理由もなく」を忘れていたものと考え直して納得します。

また、ある日偶然に、豚たちは農場住宅の地下室でウイスキーの箱を見つけました。そして、すぐさま他の動物に気づかれないように酒盛りを開きます。明らかに第5戒「およそ動物たるものは、酒をのまないこと」にもとる行為です。そこで、第5戒の「酒をのまないこと」の前に「過度に」が付け加えられ、豚たちの飲酒は合法的行為に転じます。これで、第4戒、第5戒、第6戒が改正されたこととなります。

相次ぐ「憲法改正」に他の動物たちはそのたびごとに違和感を感じました。しかし、自分たちの記憶が不確かだったと思い込んでその違和感にふたをしたのです。そして、いつしか慣れてしまうのです。気づくと、そこには打倒したはずの体制が、支配者を変えてそっくりそびえ立っているのです。

ユートピアの落とし穴にはまらない三つ目として、違和感に慣れないことが挙げられます。さもなければ、「変わらない風景」に脳が徐々に反応しなくなります。この繰り返しの果てに、革命の理想とは遠く離れた、とてつもない抑圧体制が自分たちをがんじがらめにしていることに慄然とするのです。それではもう遅い。

動物農場では「七戒」はついに全部改正されるに至ります。「すべての動物は平等である。しかし、ある動物は、ほかのものより、もっと平等である。」そして、豚たちは人間と同じように二本足で歩くのです。豚か人間か見分けがつかなくなって、このおとぎ話は閉じられます。

5 「前史」は終わらない

最後に、拙著でも何度か引用したマルクスの『経済学批判』序言の次の一文を再検討したいと思います。「この社会構成体〔資本主義社会〕をもって人間社会の前史はおわりをつける。」

実は私もこの一文に心惹かれました。しかし次第に、こういう発想はとらないほうがいいのではないかと思ひ直すようになりました。「ほしがりません、勝つまでは」というか「約束の日」が訪れるまでやせ我慢をする。それは美しいかもしれませんが、それだけの我慢を重ねてユートピアが実現すれば、それは我慢した分だけ寛容ではありえない。すぐに逆ユートピアに転化します。

一発逆転できるとは考えない。来世信仰に陥らず、継続的にいまの矛盾をひとつひとつ *piecemeal* につぶしていく。終わりなき日常を生きる。はなはだ微温的ですが、そのほうが息苦しいユートピアを実現するよりずっと健全であろうと考えます。